



剥

製

少

年

主よ、全ての死せる信者の靈魂を
ことごとく罪のほだしより解いて
ください。

彼らが主の聖寵の助けによって
刑罰の宣告をまぬがれ、
永遠の光明の幸福を楽しむにいた
らんことを。

登場人物

- シリウス・ミラー……絶世の美少年
- カナメ・ミナト……孤独な日本人の少年
- アダム・クラーク……遺体で発見された生徒
- ミカエル・ロビンソン……花京院と同室の少年
- サイラス・ピアス……理科教師
- エリザベス・カー……学院長
- ロベルト・ピアス……前学院長・故人

■ Please read the notes below before reading this book.

- ・創作人物、創作スタンドが登場しますのでご注意ください。
- ・時間軸的には4部後。生存院設定です。
- ・原作とは違う捏造的設定があります。
- ・流血・暴力表現等、残酷描写がございます。ご注意下さい。
- ・本書は実在する組織、個人等とは一切関係ございません。

序章

愛している、と彼は言った。

彼もまた、彼を愛していた。

いっそのこと、ひとつになりたいと思った。

そう思わせるのは何故だろうか。

何故なのだろう。

†

少年が逃げていた。

息は荒い。全身が恐怖で凍っていた。

狩りは始まったばかりだった。

少年達がそれを追い立てる。森の中は少年達にとって絶好の狩りの場所だった。

少年が木の隆起した根に躓き、湿った土の上に転がる。

すぐに起き上がろうと少年は足掻く。けれど震える手足ではうまくいかない。

少年達が追いつく。絶望した少年が見上げる。

彼らは——嗤っていた。

銀色の剣が、振り上げられた。

きらりと太陽で光った輝きが、少年が目にした最期の光景だった。

第1章

「これはダメだったね」

ぽつりと、少年がつぶやく。

深い深い森の中。木漏れ日が湿った土や草を照らしていた。

森巖とした空気が漂っていた。少年がそれに、応えた。

「そうだね。何か、間違ったのかもしれないね」

「そうかもしれない。代わりを探さないと」

「そうだね。代わりを探そう」

「ぼくたちの永遠のために」

「ぼくたちの天国のために」

少年たちは無垢なる瞳で遺骸を見下ろした。

彼らは魂なき遺骸を埋葬すると、その場を立ち去った。

木々の隙間から差し込んだ光は、真実を照らさない。

†

スコットランドのとある学院で、奇妙な失踪事件が起こっている——と。

そんな話を聞かされた承太郎と花京院は、対面に座ったS P W財団超常現象部門の部長を前に、

眉根を寄せた。疑問顔の二人に対し、ずり下がってきた分厚い眼鏡を上げた部長は、手にあつた資料を二人へと寄越した。

受け取つた花京院はざつと目を通してから、ちらりと部長を見た。

「……確かに生徒が二、三年に一度失踪しているのは事実のようですが、スタンド絡みの事件だという根拠は？」

花京院の問いに承太郎も賛同の意を込めて部長を見遣つた。

こういった弱者が——特に幼い子供が巻き込まれる事件に対して、解決してやりたいという気持ちちは勿論ある。しかしスタンド絡みではないというのなら、地元警察を頼つた方が無難な話だ。スタンド使いによる犯罪を処理することは、慢性的に人材不足である超常現象部門にとって容易なこ

とではない。端的に言えばスタンドの见えない一般人でも解決できる事件ならば、自分たちスタンド使いが関与する必要性は全くないのだ。

超常現象部門の部長は、そんな二人の考えも理解しているのだろう。少し困つたようにこめかみを搔いて、それなんだがねえ、と口を開く。

「この事実が発覚したのも、前学院院长が亡くなつて今の学院院长……エリザベス・カーが着任してからなんだ。それまではずっと、この失踪事件はただの家出だと処理されてきたらしい」

「つまり前学院院长は、失踪事件を黙認してきた……と？」

花京院が怪訝そうに問えば、部長は頷く。

「そういうことになるね。前の学院院长が作つた学院だつたからね。自分の作つた学院で醜聞は出しなくなつたのだろう。加えて、前学院院长である

ピアス氏が慈善事業として設立した学院だ。地域からも警察からも信頼が高い。だが急逝されてから選ばれた現学院長のエリザベスは、外部の人間だったからこそ、流石に看過できなかったようだ。偶然彼女の親族がこの財団に所属していたから、地元警察ではなく我々を頼ったというのもある」

だが無論それだけじゃあない、と部長は言う。「これを見て欲しい」と一枚の写真を机の上に置いた。承太郎と花京院は覗き込むようにして、その写真を見た。

「これは……死体、か？」

写真を見た承太郎の喉から低い問いが漏れる。

部長は重々しく頷いた。

「そうだ。先日同じ市内の森で見つかった死体だ。身元を調べたところ被害者の名前は、『アダム・クラーク』。例の学院の生徒だったらしい」

花京院は手元に引き寄せて承太郎と共に改めてその写真を見やった。花京院の、その涼しげな目元が細められる。

写真には一人の少年が写っていた。まだ十にも満たない年頃の美しい少年だった。柔らかな土の上、仰向けに横たわった少年は天を仰ぎ見ていた。曇り空の下なのか。少年の栗毛色の髪は褪せており、肌色は屍蠟のように白い。動く気配もないその静かな写真の中で少年は、その瑞々しい身体を隠すことなく素肌を曝け出していた。全裸で横たわる少年は一見すれば精巧にできたマネキンのようにも見える。

けれどその胸の中心には、赤が。黒ずんだ血で描かれたような奇妙な文様があつた。

まるで——そう、何かの儀式の痕のような。ナイフで一突きされたにしては、やけに綺麗な

切創。そしてその中心から広がる葉脈のように複雑な図柄は、それこそオカルト的な——所謂、魔法陣か何かのように見えた。

「しかし、これだけじゃあまだ、ただのオカルト殺人と区別が付きません。それに学院の生徒だからって犯人がそこにいるというのは、早計じゃありませんか？」

花京院の意見に部長は「それなんだが」ともう一つ書類を差し出してくる。

「これは……司法解剖の結果、ですか？」

承太郎も身体を寄せ、それを覗き込んだ。中には写真の少年の死に関する記述があった。そこでふと承太郎はある一点に目を留めた。

「……《樹液》？」

思わずその単語が口からこぼれ落ちた。花京院もまたその箇所に辿り着いたのだろう。これは、

と声を曇らせて閉口した。部長は手を組んで困惑しながらも、その資料に書かれている「奇妙なこと」を口にした。

「そう。そこに書いてある通り、被害者の体内はごつそりと——臓器が樹脂や樹液に変わっていたんだ。骨は琥珀に、その他の部分は樹液や樹脂に近い物質で変わっていてね……」

「近い、ということは、既存の天然樹脂や合成樹脂から外れたもの、ということですか？」

「ああ。そこにも書いてあるように、中身はとも不思議な物質で構築されていたらしい。しかも防腐処理されたように何日経っても腐敗しない……そう、まるで剥製のように」

剥製、と承太郎は繰り返し写真をもう一度見た。

腐らない死体。

死体の中を埋める謎の物質。

儀式のような、謎の魔法陣。ここまでくれば、明らかに普通の事件ではなかった。花京院と承太郎は目配せしあう。この件について早急に調査すべきだとお互い言葉にしくても分かった。花京院は手元にあつた資料を一旦机に戻すと、それじやあ、と口を開く。

「できるだけ早く現地へ向かったほうが良さそうですね。すぐにでもぼくが——」

「その件なんだが」

部長が言いづらそうに言葉を紡ぐ。

「君には今回、空条氏と共に潜入調査を頼みたい。というのも、どうやらこの件は学院の生徒たちが関わっているようなんだ」

だから、と部長が承太郎を見て言葉を継いだ。

「花京院君、君には学院の生徒として内側からこの件を見て欲しい。空条氏には理科の特別講師と

して調査に入ってもらう予定だ」

「ちよつと待ってください。生徒側と言っても、この学院は初等部……つまり日本でいう小学校でしょう？ それをどうやつたら——」

と言いかけて花京院の脳裏に、まさか、と嫌な想像が過ぎつた。

「……先月捕まえたスタンド使いの能力をぼくに使う、ということですか？」

「ああ、そうだ」

きつぱり部長はそう言い切ると、微かに哀れみの色を送ってきた。承太郎がその二人の間にある気まずさを感じ取って何かと訝しげに思えば、察した花京院が溜息と共に説明の口を開く。

「実は先月、対象を子どもにするスタンド使いを見つけたんだ」

「……旅の間にもそんな奴はいたな」

アレッシーだったか、と承太郎が渋面で言えば
花京院は「似たようなものかな」と苦笑する。

「だが少し違っているのは、そのスタンド能力は『昼間は体も精神も幼児化できる』ものでね。持続時間も人によつて微妙に異なるらしいが半月から一ヶ月ほどらしい」

「昼間は、ということは夜は違うのか？」

問いかけに花京院が頷く。

「ご明察。それがこのスタンドの唯一の弱点ともいえる部分なんだが——夜は精神だけ実年齢に戻るんだ。昼間得た記憶はちゃんと夜には引き継がれる」

「つまり、夜間の間に情報のすり合わせができるつてワケか」

それは理解したというように承太郎は言う。だが納得できたわけではなかった。

「オイ、てめーが幼児化してる間ハイエロファントはどうなる？」

「承太郎、そんなに怖い顔をしないでくれ」

「花京院」

はぐらかすな、という意味を込めて睨みつければ花京院はやれやれと肩をすくめた。

「……きみが予想している通り、ハイエロファントグリーンもぼくと同じように幼児化……要は弱体化する。ちなみにこのスタンド使いの厄介なところは、スタンドが精神年齢ではなく肉体年齢に依拠するということだ」

「つまりお前は日中、精神はガキのまま、スタンド能力にいたつては丸一日中弱体化されたままつてことか。しかもそんな危なっかしー状態で、ひとりでその学院に潜入だど？」

承太郎はそこからはもう間髪入れずに、部長へ

と答えを返した。

「悪いがその案は受け入れられない。こいつが危険すぎる」

その迫力に押され超常現象部門の部長も、うつと、息を詰める。だが、承太郎とこうしてやり取りするのは初めてではない。凝り固まった緊張を吐き出すように息を吐くと、改めて向きあつた。

「だが、それ以外に効率の良い方法はない。閉鎖的な、しかも子どもの世界だ。そこに大人が入り込む隙があるとも思えないし、何より生徒だけじゃあなく教師もこの件に絡んでいる可能性がある。そこで、空条氏。あなたには花京院くんのバックアップを頼みたいんだ。彼を守るのは貴方くらいだろう？」

少しの挑戦の意を込めて部長がそう承太郎へ向かつて問う。二人の関係を——恋人同士であると

いうことを——知ってからこそわざと言つたのだ。承太郎の眉が、ぴくりと微かに動いた。花京院はというと何か言わずには居られなかったのだろう。「彼に守られるなんて、そんなばくは」

「つもりはない、というかね？　だが昼間、子どもの状態にある君は無防備だ。君の実年齢の意識は決して出られない薄膜一枚を通して見ることでしかない。ただ敵スタンド使いに、指を咥えていいようにされるといふのはお勧めしないし賢くないと思うが？」

部長の言い分に花京院は返す言葉もなかった。その通りだったからだ。承太郎もまた、この普段はお人好しの部長の言い分が正しいことを、頭では分かつていた。

どの道、避けられないというのならば——それだつたら自分を守るほうが良いに決まっている。

大切な恋人の警護という重役を誰かに引き渡す気はない。承太郎はそこまで考え、いいだろう、と同意の意を示した。その同意に隣に座っていた花京院が「承太郎！」と声を上げる。承太郎はちらりとそちらへと視線を送って言葉を返した。

「お前だつてそうするのがベストだと分かっているだろう？　気は進まねえが、ためーを守る役を他の誰かに譲るのは御免だ」

そう言われて、花京院は悔しそうに眉根を寄せた。伶俐な青年だからこそ、どうすべきか分かっているのだろう。少しの遅疑のあと、花京院は降参といったように溜息を吐くしかなかった。

+

スコットランドの都市アバディーンから車で一時間半ほど走らせれば、田園風景が広がる郊外へと出た。SPW財団のエージェントが運転する車の後部座席には白い衣服を纏った承太郎と、うつらうつらと眠りそうな赤毛の少年——花京院がいた。その小さな身に纏っているのはこれから行くピアス初等学院の制服だ。禁欲的な黒のブレザーに緑のタイを締め、黒のハーフパンツに白いソックスを合わせている。今、時刻は朝の八時前で朝日は昇った頃だ。その精神はその身と同じく八歳児へと変わっていた。

あらかじめ現地に入る前に、大人の承太郎に慣れるよう一週間ほどは生活を共にしたおかげか、

今は信賴を寄せてくれているらしく「はかせ」と呼んでくれるまでになった。最初に「空条博士だよ」と他の大人が紹介した名残だろう。慣れた今でも承太郎呼びしないのは、幼いながらに礼儀ができてゐる花京院らしいといえ、花京院らしいことだった。夜が更けるにつれ精神が二十八歳に戻りゆくのは見ていて面白かったが、二十八歳の花京院としては昼間の、八歳の自分の記憶があるのは大変気恥ずかしいらしい。初日は布団を頭から被つて出てきてくれなかつたほどだった。

こつん、と腕のあたりに軽い感触があたる。見れば睡魔に呼ばれてしまったのだらう。幼い花京院が頭を承太郎に預けていた。上から見ると白く血色の良い、まるみを帯びた頬が見えた。子どもというのはこんなにも曲線が多いものだっただらうか。そうまじまじと承太郎が見やっていると、

ふと、自分が寝てしまつていたことに気づいたのだらう。ぱつと花京院が慌てて姿勢を正して、頬を紅潮させた。

「す、すみません。ぼく」

「いや、いい」承太郎はその大きな手で小さな頭を引き寄せた。「ついたら起こしてやるから、眠つていろ」

でも、と子どもらしい――幾分より高い恋人の――声が聞こえる。健気な瞳を承太郎へと寄越して、本当にいいのかと窺ってくる。子どもへそういつた趣味はないが、愛しい花京院だと思つて違つてくる。自然と承太郎の頬は緩み、殊更やさしい微笑を送り返した。

そうすれば、花京院は緊張を解いてへにやりと柔らかな頬をゆるませて笑う。

「……ありがとうございます、はかせ」

ぼすんと寄りかかってきて、すうすうと、寝息をたてはじめる。どうやら相当無理をしていたらしい。承太郎は壊れ物を扱うように、花京院の、やわらかい髪の毛を撫でて梳いた。二十八の花京院も柔らかな赤毛をしているが、八歳の花京院の髪の毛はなんというか——うまれたての子猫のような感触だった。

可愛いな、という独り言が自然と漏れる。愛らしいという温かい気持ちがいんと胸の奥から広がっていく。穢れを知らない無垢な身体は、子どものためか大人のときより幾分か高い。無防備に、信頼しきつてもたれるその身体が心が、愛しくて切なくなるくらいだった。

あともう少しで件の学院には辿り着くという。空は白ばんだ曇り空が広がっていて、全体的に暗い色調の陰影を世界に落としている。流れ行く田

園風景も晴れた日に見ればきつと美しいのだろうに、寂しげに見える。やがて車は田園を抜け森へと入っていく。両際に茂った木々はより一層暗く、木立の間から化け物でも飛び出してきそうな想像さえさせた。

——確か死体が発見されたのも森の中、だったか……。

これから子どもの花京院と共に潜入する学院は森で囲われて、生徒たちの秘密の遊び場になっているとも聞く。本来はより良い情操教育のために自然の中に建てられた学び舎だが、それが却って裏目に出ってしまったようだ。

承太郎は花京院の小さな肩を抱き寄せる。絶対にこの愛しく、今は無力に近い少年を守らなくてはならない、と。敵は生徒の中にいるか、教師の中にいるか分からないのだ。もつといえは学院の

外部の者の犯行だというのも視野に入れなければならない。

不意に、はかせ、と。おさない声が舌つたらずに呼んでくる。起きたのかと思つたのだが、何か夢を見ているらしく、その小さく柔い手は承太郎のコートを掴んでいた。普段、大人の彼がここまですることなど、それこそ情事のときくらいのことだから、それが嬉しく思つてしまつた。承太郎はあやすように花京院の髪や、すべすべとした頬を撫でながら思案に耽る。

いつから花京院は——誰かに甘えることを、しなくなつたのだろう。

家族と関係がうまくいっていなかったということは聞いている。生まれた時から法皇の縁と共にいて、そんな見えない友人のために家族との間にくつきりとした線ができてしまつたことも。

——ならば、彼は。

こんな子どもの頃にはすでに、ひとりぼっちの世界にいたのだろうか？

承太郎は前方を見る。緩く弧を描いた坂の上に例の——生徒の失踪事件が起こっている、ピアス初等学院が見えてきていた。その敷地は広い。学長であり創始者であつた亡きピアス氏の邸宅と、学舎、学生寮、教師たちが寝起きする宿舎があるからだ。だがその色調は黒と白で色付けられていて、まるで巨大な棺桶か墓場のようだった。

自然と、承太郎の手に力がこもる。花京院の温もりはまだ腕の中にある。それを、あと少ししたら手放さなくてはならないのかと思うと——心に濃い、暗雲が立ち込め始めるのだった。